

巻頭言

はたらくことは、繋がること、生きること —いのちと社会に向き合う協同労働(よい仕事)の 意義を問う—

小林 勲 (センター事業団 専務理事/会員)

2018年3月3日-4日の両日で「全国よい仕事研究交流集会2018」が開催された。テーマは「いのちと社会に向き合うよい仕事・協同労働とは何か。その深化・発展のプロセスをみんなで考える」であったが、まさにその内容が格段に深まった2日間になったのではないだろうか。

私自身も全国集会で初めて基調提起をする機会を得た。すべてを上手く伝えることは出来なかったが、基調提起で最も伝えたかったポイントは、昨今の新自由主義とグローバル資本主義の経済により、壊されたもの、失ったもの、その点を明らかにし、それらを取り戻す力と再生する可能性が、地域と協同労働の中に存在するという点である。「働くこと」が社会と繋がること、更には繋がることで「生きること」と同義であるならば、社会や地域と分離された労働のあり方が労働の劣化を一層加速させているとも考えられ、経済的合理性が最優先される社会や経済の下で、人間の関係まで分断させる労働が広がっている。私たちは、生活と地域を焦点とした事業・運動を展開し、地域の人々と繋がり連帯する中で、多

様で豊かな地域の展望を切り開く一翼を担い始めている。また、これらは今日の主流となっている経済システムへの対抗軸として、世界各地で広がりを見せているグローバル化やローカリゼーションを推進する面からも、大変意義深い取り組みだと考えられる。

記念講演は、内山節氏より「ともに生きる社会—いのちと社会を結んで」のテーマでご講演を頂いた。「伝統社会と近代社会の違いとして、繋がりや一体性をもっていた伝統社会から、近代社会では労働や経済が他のものから分離し、労働が生活の手段になってしまった。」「すべての事や物質は分解されるほど均質化していく。人間も個人に孤独に分解されていくと似たような人間になってしまう。自然や共同体との結びつきの中で、人間は個性や力を発揮する」など、私たちの「よい仕事」といのちや社会との結びつきや関係を考察する上で多くの示唆があった。

私の基調提起でも、ローカル・フューチャー(ヘレナ・ノッジ・ノーバグ/「幸せの経済」映画監督)の著書より一部を引用したが、両者の見解は共通点

も多く親和性が高かったように思う。そこではグローバル経済の本質についてこう述べられている。「グローバル経済とは“技術＝経済システム”です。それは、生命のあらゆるものを商業化し、売り買いできるようにすること。それは“分離(セパレーション)”によって繁栄します。人間同士の関係を分断し、地域や自然から私たちを切り離すことで成長する。つまり、経済のグローバル化は、私たちに不可欠な自然や人間同士の絆とは、相容れないものなのです。」

本質的には不可分であった、労働と経済の分離、人間と自然の分離、人間同士の繋がりなどがこの間失われた価値であるとすれば、裏を返せば、協同労働にはそれら分離した価値を結合させる働き方になりうるのかを問われており、また、それこそが『いのちと社会に向き合うよい仕事』の本質なのではないかとも考えられる。つまり、今回新たに提起された「協同総合福祉拠点づくりーみんなのおうち構想」や、事業の『3層構造(1層：地域づくり・生活支援等、2層：制度事業・委託・指定管理等、3層：第1次産業など)』への挑戦、事業の『複合化』・『総合化』などの一連の方針は、結果的にすべてが密接に繋がっているのである。

一方で、リレートークでは、ワーカーズコープの光と影とでも表現すべき異なる内容の報告がなされたが、両者の

明暗も含めて格段の深い学びの機会が得られたように思う。

WORKERS NET RINGSの木下史郎所長の発言には、純粋に圧倒させられた。就労者28名の内16名が精神的な疾患を抱える仲間であり、居場所と呼ぶべき職場づくりと仲間同士の支え合い、ともに働くことを通じてそれぞれの自立を促す、一種の職場内コミュニティとも呼べるような包摂を生み出している。その実践は、さながら社会的企業(Social Enterprise)のような迫力があつた。宇都宮地福の森本宏美所長の報告からは、既に「協同総合福祉拠点ーみんなのおうち構想」の実践事例とも呼ぶべき「きずなの家」を起点とした多様で豊かな実践の広がり、「Hosono Lab構想(もりのいえを利用した福祉施設)」への発展など、居場所機能から地域内で繋がり創造の連鎖が生み出されており、福祉を起点に3層すべてを結ぶ、その地域デザイン力に感銘を受けた。協同労働運動は新たな発展の局面へ一歩を踏み出していると実感させられた報告であつた。

そしてふじみ野地福の発言には、色々と考えさせられた。もし今1年前に戻れるのであれば、何を最優先にして成すべきだったのだろうか。困難を抱える1人の仲間の人権と多数の仲間の生活と仕事が天秤にかけられた問題、そして今でも葛藤と苦悩を抱えながら働いている仲間の姿がある。根本問題は、担当部

署の人権侵害ともとれるような発言や指示にあるのだが、仕事を請け負う立場の弱さもあり、結果として問題のすり替えられ“こちら側”の問題として対応を迫られた。一方で、この判断は、指定管理者としての「立場」、ワーカーズコープとしての「立ち位置」の選択であったとも考えられる。ワーカーズコープ内でも相当な割合をしめる公共事業(委託・指定管理)において、本件は重要な事例であると考え。同様の問題が起こった際に、公権力の濫用にどう向き合うのか、何を拠り所にして判断すべきなのか、仕事の継続、立場の脆さ、人としての倫理観、社会正義とは何かなど、各々感ずることが多かったのではないか。

大高研道先生のまとめは、その核心を鋭く突く内容であった。「指定管理事業」で失ったものに、①民主主義や正義を糾す力、②2つのソウゾウリョク(創造力・想像力)の2点が挙げられた。指定管理者制度は、請負契約と異なり公共施設の管理権限を包括的委任する制度であるが、制度施行から丸14年が経過し、議会の対策と担当部署の保身的傾向から、他の契約形態では類を見ない行政側からの過度な管理(過干渉)をされるケースが組織内でも散見されている。これらの指摘は、私たち自身が制度の利点と弊害を十分に理解した上で付き合う必要があることや、あくまで制度は活用するもの(仕組み)という立ち位置の重要性を感じさせられた。

最後になるが、1日目の全体会で鑑賞した、映画「被災地に起つ—ワーカーズ」について触れておきたい。この作品は見ていてとてももどかしい。うまくいかない現実や仕事を辞めようと揺れ動く仲間の姿、少しずつ地域に受け入れられ始めるワーカーズの組合員、地域に向かう中で地域の人々との関係性の変化が丁寧に描かれている。しかしながら、この「ゆっくり」という時間軸こそが復興の本質なのだと感じられた。そして、被災地の今を生き、明日への希望を切り開こうと奮闘する人々、被災後8年目のリアルな姿がそこにある。

上映後の感想文には、東北で実際に被災した仲間より実感の異なる感想が寄せられていた。「(震災は)風化したとメディアは多く語りますが、そもそも復興のステージにすら上がれないエリアと人々の営みがあるということを強く感じます。ここから何を学び、私や仲間には何が出来るだろう。やれること、やらなければいけないこと、…できることを諦めず、粘り強く、地道に力を尽くしていきたい。この作品を観て、改めての決意と大きな可能性・希望を感じられました。」震災から丸7年が経過しているが、この仲間の感想には、森監督が言われる「震災後の時代は今始まったばかり」という言葉が重なる。本作の上映を通じて、被災地の“いま”を伝え、社会に一石を投じる運動に発展していくことを期待したい。